

## VI 総合的な学習の時間（はばたき学習） 3年次の成果と課題

### 1 成果

#### (1) 探究的な学習過程で「見方・考え方」を自覚的に用いる力を高める学習活動の明確化

今年度は、探究的な学習の過程で目的や自分に合った「見方・考え方」を選択し、用いていく活動を単元に位置付け、各学年の実践に取り組んだ。

その結果、「見方・考え方」を自覚的に用いる力を高める上で、核となる二つの学習活動を見いだすことができたことが成果である。

一つ目は、よりよく課題を解決していくための視点を、子どもたちと共につくり上げていく活動である。4年生では、わかば学級との事前交流を通して見いだした課題をもとに、交流計画を見直す視点を自分たちで見いだす活動を単元に位置付けた。その結果、交流相手の「Aさんも自分も楽しむ」という視点を自分たちの言葉で設定することができた。このように、自覚的に用いる力を高めるためには、「相手意識を高める」といった一般的な表現ではなく、より具体的で明確な「子どもの言葉」で「見方・考え方」をつくり上げていくことが重要である。なぜなら、すぐに使える分かりやすい表現に落とし込んで初めて、“自分のもの”として用いることが可能となるからである。

二つ目は、探究過程の各段階で子どもたちが自分たちの言葉でつくりだした「見方・考え方」を段階的に拡張し、選択していく場を設けることである。

4年生の子どもたちがはじめに見つけた交流計画のポイントは「分かりやすい」「安全」といったものであった。自分たちの手で、よりよい交流にするための「見方・考え方」を見つけ、探究を進めていく中でこれらを拡張し、「一緒に楽しめる」「自分で決める」といった新たな視点を加えていった。そして、状況に応じて「今、大切な視点」を選択しながら改善していく姿が見られた。

また、5年生も、働く人へのインタビューを重ねる中で「仕事を始めてから見つけたやりがい」「失敗したときどうしたか」という探究の視点を見いだしていった。

このように、総合的な学習の時間は、探究していく中で、課題が更新されていくという点に特徴がある。だからこそ、状況に応じて新たな、そしてより効果的な「見方・考え方」へと拡充し、適切なものを選択していく学習活動が必要となる。

#### (2) 視点の共有化による協働的な省察の質の向上

二つ目の成果は、省察の視点を子どもの言葉で明確かつ具体的にすることで、視点の共有化が図られ、「対話」を通じた協働的な省察の質の高まりにつながるが見いだされたことである。

3年生では、四つのお店について調べ、共通点について考えていく中で、「商店街を盛り上げる取組」「人と人とのつながり」という新たな視点を見だし、さらに探究を進めていく子どもの姿が見られた。

また、4年生でも、「相手も自分も楽しい」という視点を共有し、「対話」を通じた協働的な省察を位置付けたことで、共に楽しむためのよりよい方法を見だし交流活動を改善することができた。6年生では、自分たちで設定したテーマや見学の目的を共通の視点として話し合う中で、研修計画を吟味したり更新したりしていく姿が見られた。

このように具体的な視点をつくり出し共有した上で、協働的な省察に取り組むことは概念を更新していく上で非常に効果的であることが明らかになった。

### 2 課題 自分にとっての答えとしての概念を形成していくための省察の支援の工夫

総合は、探究的な過程を通して概念を形成していく教科である。探究的なスパイラルの中で、“自分にとっての答え”としての概念をつくり直したり、自らの考えや生き方を見つめ直したりするところに教科の本質がある。

今年度は、探究的な学習過程の質を高める省察を位置付け、各学年で実践に取り組んだものの、「創意」「参加」「勤労」「多様性」「共生」といった単元の核となる概念を子ども一人一人が自分の言葉で意味付けるという点では課題が残った。

その原因としては、単元の導入や探究過程の各段階で随時、学習対象について言語化していく活動が不足していたことが挙げられる。収集した情報を、整理・分析する段階で分類したり、ラベリングしたりする活動を取り入れ、個と協働の省察を往還しながら、学習対象の自分にとっての意味を徐々に明確化していくステップが必要であると考えられる。一般的なありふれた答えではなく、探究したからこそ見いだすことのできた“自分にとっての答え”を出し合い、高めていく子どもの姿を目指し、今後の実践に取り組みたい。